

言っていないことは“意図された”ことと想定すべきなのか？ Should we assume that what we are not saying is “intended”?

安田 哲也[†]

Tetsuya Yasuda

[†] 東京電機大学理工学部

Tokyo Denki University

t-yasuda@mail.dendai.ac.jp

概要

コミュニケーションを行うためには、言語のやり取りのみならず、そこに明示されていない文脈も考慮に入れなければならない。しかしながら、明示されていない情報を想起することは幼児にとって難しいが、成人は情報(構造)を補完し解釈することができる。この構造化を見出す力がコミュニケーションを阻害している可能性がある。本発表では、意図共有という観点からヒトの推論能力等を議論し、SNS 等の非対面コミュニケーションへの示唆を考察する。

キーワード：含意, alternatives, 意図推測

日本語においては、この量的含意がうまく表現がなされない時がある。例えば、「ある研究室に所属している学生はお金持ちである」のような場合は、量的な語は含まれていないが、恐らくある研究室に所属しているすべての学生がお金持ちではない(i.e., 何人かの学生はお金持ちである)というような解釈を行うことが考えられる。日本語では、照応を利用した表現がよく使用される。そのため、文脈を提示することが難しいような状況においては、誤った解釈をしかねない。

1. 言語とコミュニケーション

適切にコミュニケーションを行うためには、その発話に込められた他者の意図を、その発せられた状況や共同注意や指さし等の非言語情報を利用し、適切に推測しなくてはならない(Tomasello, 2008)。発せられた語からその意図を推測して解釈を行う際、その意図は必ずしも明示されているとは限らない(e.g., Irony; Wilson & Sperber, 1992)。例えば、皮肉は字義的にその表現を解釈すると賞賛だが、なされた状況とその表現との意図の乖離により賞賛ではないことを暗に伝達する。コミュニケーションにおいてこのような過程が存在するのは、発話を純粋に記号のやり取りから解釈するのではなく、発話を推論し、その発話を解釈しているからである (Sperber & Wilson, 1995)。

2. 他者を推察する能力

含意(その語/発話に込められた意味: 推意)を考慮した解釈を行うことは、単純ではない(Noveck & Reboul, 2008)。特にコミュニケーションの意図伝達において参与しているのが量的含意(scalar implicature)である。量的含意とは、提示された語(e.g., some)に対応する語(e.g., all)を否定することにより、提示された語の意味を強くするというものである。それは量のみに関わらず、尺度的な意味がある語に対しても適用される (文献)。例えば、「今日は暖かい」という発話は、今日は暑くはないことを意味する。

3. 幼児期の推察する能力

5歳前後の幼児では some 等の alternatives を持つ語の推測/理解(i.e., スカラー含意)は獲得の途中であることがわかっている (Papafragou & Musolino, 2003; Stiller, Goodman, & Frank, 2015)。その一方、その語自体が持つ ad hoc 含意に関しては、2歳の幼児でも理解できることが示されている (Yoon & Frank, 2019)。Yasuda and Kobayashi (BCCCD 2019)では、例えば「かばんをもって人がいます」というような刺激文を用い、some 等の scalar alternative を仮定した解釈を行うかを調べた。幼児は「かばんを持っている人がいます」という文を、すべての人が持っているという解釈を行った一方、成人は scalar alternatives を仮定した、何人かが持っているという解釈を行った。よって、成人は、「かばんを持っている人がいます」という文を、「…(何人か)います」という(勝手に)量的情報を埋めるような心的な操作を行った可能性が考えられる。一方、幼児は、字義通りにあるものが存在しているか/していないかに焦点化した解釈であった。明示しない情報を推測するような心的な操作は難しいことが予想される。

4. 成人は(不完全な文に)構造化を見出す

Yasuda and Kobayashi (2019)が提案した、「かばんを持っている人が(何人か)います」という解釈は、例えば「かばんがあります」のような単純な文でも起こりえるの

だろうか。もし scalar alternatives を仮定した解釈がなされるとすれば、「(いくつかの)かばんがあります」と解釈されることが予想される。

Yasuda and Kobayashi (in prep)では、大学生 41 名を対象とした Microsoft Form を利用した実験が行われた。刺激は、Yasuda and Kobayashi と同様に量の伴った絵カード(some, all, none)が用意された。刺激文は、複文として「花をもっている人がいます」、単文として「花があります」が提示された。参加者は、刺激文が出た後に絵カードを観察し、最も適切に刺激文を表現しているカードを選択した。混合計画の三要因分散分析の結果、刺激文の主効果と順序と刺激文の交互作用が認められた。初めに複文が提示された後に単文が提示された方が、初めに単文が提示されたよりも、some という解釈を行っていた。また初めに単文が提示した場合でも複文が提示されると、some という解釈を行っていた。よって、複文の方が、言語が持つ構造に着目しやすい。しかし、複文を解釈するという経験を得た後に、単純な文を解釈する場合には、単純な文でさえ some を見出した。

この現象は、Grice の提案した量の公準に基づく、言っていないことに意味を見出すという解釈で説明することは可能である。しかしながら、この解釈方略で参加者が発話意図を推測しているならば、単純な文である時にも同様に「かばんが(何個か)あります」となることが考えられるが、そのようなことは見られなかった。

5. (特定な)意図を(勝手に)見出す力

この「かばんを持っている人が(何人か)います」という解釈は、意図共有(Tomasello, 2008)の観点から説明すると妥当である可能性がある。参加者が Some という意図を見出さなかった単純な文では、ある特定の意図を伝えたいという意図が希薄である。一方、Some と解釈できる複文を経験した後は、単純な文でも同様の意図を見出していた。意図共有の働きが強いと仮定できるならば、高次の構構性を見出さなくてもよい文(e.g., 単純な文)に対しても意図を共有しようと心的に働きかけたと考えることもできる。

Yasuda et al. (JSL2021)では、「かばんを持っている人がいます」という文を用い、ある意図を見出すことが容易な同じグループ(e.g., すべてのカードがクマ着ぐるみの人がモノを持っているような刺激と、そうでないそれぞれのグループ(e.g., クマ(some), ウサギ(all), ネコ(none)の着ぐるみ)の人がモノを持っているような刺激

を提示した。成人は同じグループを提示されると alternatives を仮定するのが容易らしく、some という解釈がなされていた一方、違うグループが提示されるとその alternatives を仮定することが難しいということが報告された。Yasuda et al. (in prep)では、このグループという要因に知覚的な色という要因を追加して、some という解釈が起こるかを調べた。すべてのグループが違う色で表現され、かつ違う着ぐるみで表現された場合に最も some を見出さなく、all として解釈していた。また、このような状況においては、そもそも some を解釈することが困難であった。よって、構構性を見出すような力は、意図を見出すために構構の「隙間」を感じ取れることが重要である可能性がある。

6. 意図推測が意図共有をもたらす(?)

ある種の SNS における文は投稿できる文字数が限られている。よって、何かの情報を埋める(過剰な)意図共有が生じやすい状況が、そもそも SNS の環境にはあることが考えられる。SNS は対面コミュニケーションとはかなり様相が異なり、表情等のフィードバックはない。よって、ある程度単純でない文は話者の意図とは反した alternatives を仮定した解釈が行われてしまう可能性は否めない。

この(過剰に)意図を読むという能力が、自分の意図したい推論を(過剰に)生成する可能性もある。例えば、日常場面でも過剰に意図を読む場面は生じる。共創的コミュニケーションを精緻に調べるためには、例えば、意図共有しにくいしやす状況はあるのか等、様々な側面から研究する必要がある。

謝辞

参加者に感謝を申し上げます。構構性に関する実験を行った東京電機大学の卒業生である宮川君にも感謝を申し上げます。なお、本研究は JSPS/MEXT KAKEN JP17H06382(H.K.)と JSPS JP20K0355 (T.Y.)の助成を受けて行われました。

主要参考文献

- [1] Noveck, I. A., & Reboul, A. (2008). Experimental pragmatics: A Gricean turn in the study of language. *Trends in cognitive sciences*, 12(11), 425-431.
- [2] Sperber, D. and Wilson, D. (1995). *Relevance Theory: Communication and Cognition*, Second Edition, Blackwell.
- [3] Yasuda, T., & Kobayashi, H. (January. 2019). Comprehension of weak and strong scalar implicatures in Japanese young children and adults, Yasuda, Tetsuya, and Kobayashi, Harumi, Poster presented at the Budapest CEU Conference on Cognitive Development (BCCCD 19), Budapest, Hungary.